

令和元年度豆類需給安定会議、 令和元年度豆類産地懇談会、 第66回豆類生産流通懇談会の開催

一般社団法人全国豆類振興会

豆類の生産・流通・加工の関係者が一堂に会して、豆類の主産地十勝の作況を視察するとともに、今後の需給状況に関する情報・意見を交換し、北海道産の豆類に対する理解を一層深め、豆類の生産・流通の安定と消費の維持・確保を図ること目的として、(公益社団法人)北海道豆類価格安定基金協会、全国豆類振興会及び北海道豆類振興会の三者が主催して、9月5日(木)に北海道十勝管内の帯広市、音更町、芽室町において、令和元年度の豆類需給安定会議、豆類産地懇談会、第66回豆類生産流通懇談会を開催しました。

今回の会議には、生産・流通・加工等業界、行政・試験研究等の関係者約70名の参加を得ております。

まず、午前中に十勝農業試験場において本年の豆類の生育状況についての説明を受け、その後、芽室町、帯広市川西の農家のほ場を訪問し、作況状況調査を実施しました。午後には、関係者による懇談会が開催されました。

以下にこれらの概要をご紹介します。

現地検討会の概要

午前：現地検討会 8:00～12:00

1) 十勝農業試験場(芽室町)

十勝農業試験場研究部小豆菜豆グループの奥山主査から、ほ場にて今年の小豆、菜豆の作況について説明をうけた。人手不足もあり今年の小豆の播種日が5月28日と例年より4日遅れたが、8月上旬の高温多照



場内の小豆のほ場の状況



場内の金時類のほ場の状況



中央が吉本さん



4.6ha一面の小豆ほ場

で生育が旺盛となり、本葉数は平年並みに回復した。高温により落花が見られ、また、開花が遅れたことから、現時点での着莢数は平年を下回っているが、今後台風や早霜の被害がなければ、場内の小豆は平年作が見込まれるとのことであった。

金時類は、現状では葉数は平年並みであるが、草丈、分枝数、着莢数は平年をやや上回っており、作況はやや良とのことであった。

2) 農家ほ場(芽室町、帯広市川西)：

2軒の生産者のほ場を回り、現地で生育状況、着莢状況、登熟状況等を検討した。

①芽室町の吉本さん：エリモショウズ4.6haと大豆2haを生産。小豆は昨年7俵どりであった。今年は少し密植栽培とした。今後

の天候次第ではあるが、平年作が見込まれるとのことであった。

②帯広市川西の牧村さん：小豆（キタロマン2.8ha、エリモショウズ2ha）、大正金時（福勝1.1ha）を生産。大正金時は収穫前の状況。

小豆、大正金時も今後の天候次第ではあるが、平年作が見込まれるとのことであった。一部小面積で地元の特産品とするため、白花豆を栽培していた。手間はかかるが収益はよいとのことであった。

午後：第66回豆類生産流通懇談会等
13:00～16:45

1) 主催者を代表して吉田会長から冒頭の挨拶があり、続いて来賓の農林水産省の大西課長補佐から来賓挨拶及び豆類をめぐる



左端が牧村さん



福勝の着莢状況



左はエリモショウズ 右はキタロマン



福勝の子実の状況

事情について、生産、流通、消費の3つの観点から説明があった。

2) 事務局からの来賓紹介に続いて話題提供に移り、十勝農業試験場研究部小豆菜豆グループの奥山主査から、「道産雑豆の品種開発の状況と今後の取組方向」について発表があった。

3) 休憩後、一般社団法人北海道地域農業研究所顧問の黒澤氏がコーディネーターとなり、テーマを「雑豆の需要拡大を支える品種開発を考える」として、意見交換を行った。

まず、情勢報告があり、ホクレンの本郷雑穀課長から産地情勢として「令和元年産豆類の生育状況」について発表があった。今年の豆類の生産は、積算気温などの気象状況の推移から、平年作に近いと見込まれ

るものの、今後の霜害、台風の発生などの心配もあるとのことであった。

続いて、雑穀輸入協議会の鈴木副理事長から雑豆海外情勢として、主要輸入豆類の産地状況、消費拡大への取組みについて発表があった。

両者の発言後、出席者間で意見交換が行われた。



会場の状況

4) 主な意見、発言等は以下の通り。

①テーマ「雑豆の需要拡大を支える品種開発を考える」に関する意見等

・育種に当たり加工適性に配慮いただくことはありがたいが、あまりにとらわれ過ぎて育種が停滞するのは困る。

・実需者の行う加工適性試験の結果は、すべてではない。エリモショウズも出た時は、赤色が強く実需者の評判はよくなかった。しかし、使い慣れると圧倒的な品種となった。実需者は使い慣れた品種を替えたくないものだ。このことも心得て育種を進めていただきたい。

・耐冷性をつける場合に早生化がついてくることが多いので、この発想は切り離して、真に寒さに強い品種を作ってほしい。

・小豆の早生品種は、風味の点で実需者の評価は低いことから、なかなか伸びず、品種として育たない。

・作業の機械化、除草剤開発等の課題につき、集中と選択で10～20年かけるのではなく、スピードを上げ総合的な観点から豆の品種改良を進めるべきではないか。

・収量性、耐病性だけでなく、品種改良の視点として機械化適性、作業性の良さも必要ではないか。

・生産現場の課題として、小豆の管理には手間暇かかる点がある。手作業をなくすように機械化適性を高める研究を推進してほしい。

・除草剤は、連用すると耐性を持った雑草が出てくる。除草剤耐性も新たな小豆の育種の要素に加える必要があるのではないか。

・生産者が喜んで作ってくれるような品種がほしい。GM作物は農家にとって楽で作りやすいことから広がった。

②その他

・今までに小豆の価格が暴騰しても、物が無くなることはなかった。今回はなぜ売り止めになったのか明らかにすべきである。

・関係団体が資金を出してファンドを作り、小豆の余った時、棚上げ保管するような仕組みを作ってはどうか。日本の農業のために貢献したい。

・今年の小豆の栽培面積が昨年より10%も増加したことは農林水産省を始め関係者の努力の賜であると考え。実需者として深く感謝したい。

・今後の豆の生産、加工に関しては、原産地表示、GAP、HACCPの動向も踏まえて、関連業界で論議していくことが重要ではないか。

5) 黒澤コーディネーターの総括及び五十嵐氏の締めの挨拶

・黒澤氏による本日の議事の総括、続いて、公益社団法人北海道豆類価格安定基金協会の五十嵐専務理事から参加者への感謝を含めた締めの挨拶があり、閉会した。